

高島賞

高島賞は、言うまでもなく、本学会の発足、運営、国際会議招致などにあたって多大な貢献をしていただいた高島浩一氏の功績を記念して生まれた賞である。賞の対象は、ナイル・エチオピア地域において顕著な学術研究の業績および開発・援助などを含む地域活動の実績をあげた35才以下の若い地域研究者とされている。今回は、厳正な審査を経て、2名の研究者にこの栄えある賞の受賞が決定した。その2名とは、京都大学霊長類研究所の嶋田誠氏と弘前大学人文学部の曾我亨氏である。ここに両氏の研究が高島賞にふさわしい優れた研究として認められた選考結果を報告する。両氏は、受賞セレモニー直後に自らの研究をコンパクトにまとめた受賞講演を行い、参加者全員から改めて高い評価を得た。その受賞講演をもとに、両氏に自らの研究について語っていただいた。

平成11年度日本ナイル・エチオピア学会高島賞審査結果

嶋田誠氏

受賞対象研究課題：

「エチオピアにおけるグリベットモンキーの集団遺伝学的研究」

推薦にあたり検討の対象とされた論文（2編）

(1) Shimada, M.K. & Shotake, T. (1997): Genetic variation of blood proteins within and between local populations of grivet monkey (*Cercopithecus aethiops aethiops*) in central Ethiopia. *Primates*, 38:399-414

(2) Shimada, M.K. (1998): Population genetics of wild Old World monkeys; The case of the grivet monkey (*Cercopithecus aethiops aethiops*). In *Proceeding of the Tri-National Workshop on Molecular Evolution*. Uenoyama, M.K. & von Haeseler, A. (eds), pp139-146. Duke University Publication Group, Durham, NC, U.S.A.

嶋田誠氏はサバンナモンキー（グリベットモンキー）のエチオピア中央部の地域集団の集団構造や群れ間の歴史的背景を生態学および集団遺伝学的な手法により研究を行って来ており、着々とその成果を出してきている。

サバンナモンキーのエチオピアに生息する亜種グリベットモンキーの地域集団内、地域集団間の血液蛋白遺伝的変異を扱った論文では、同じオナガザル

亜科の他の種に比較して同亜種の集団内の遺伝的変異性が低いこと、集団間の差異も大きくないことが明らかとなった。また、この2つの遺伝学的様相は、古気候変動の資料が示唆するような集団サイズの変動によって生じたのであろうと結論している。

シンポジウムに招待された機会に公表した次の論文では、上記の発見に加え、ミトコンドリアDNAを用いて分析した結果も示している。それによれば、調査地域のグリベットモンキーはミトコンドリアDNAの種内変異が、他のオナガザル亜科の種のものより大きく、ある集団では、遠く離れた変異型をも保持していることが判明した。これは、遠く離れた集団間で、何らかの原因により二次的に再交流があったことを示唆していると著者は明言する。

グリベットモンキーを含むサバンナモンキーは、アフリカの霊長類で最も広い分布域を持ち、アフリカとくにサバンナの霊長類のファウナを論ずる場合、最も重要な種といえよう。本研究では、そのグリベットモンキーの集団が、きわめて複雑な遺伝的構造を持つことがわかり、アフリカ大陸の動物層の形成の研究に大きな波紋を投げかけたといえよう。

この2編の論文は、緻密な分子遺伝学的手法と深い生態学的考察に裏打ちされたものであり、同氏の研究の今後の発展、活躍を予測するに十分足りるものであると信じる。

過酷な環境での野外調査と資料収集の後、緻密な

技術を要する実験室でのDNA解析、これらは普通相容れないものであるが、氏がこれらを首尾良くこなした立派な成果を出していることを考えると両方の才能を持ち合わせた優秀な研究者と確信できる。他方、エチオピア研究への協力に関しては、推薦者が述べているように、エチオピアからの留学生に対し献身的なサポートを行い学位取得に大きく貢献し今後の共同研究遂行をスムーズにした。またフィールドなどでの他の学生・研究者たちとの良好な関係からみて、エチオピアでの対人関係も大変よかつたものと聞いている。

以上、嶋田誠氏の研究成果、その他の活動から見てナイル・エチオピア学会の高島賞に十分値する優秀な若手研究者であると確信する。

曾我亨氏

受賞対象研究課題：

「ケニア北部牧畜民ガブラ社会におけるラクダの信託制度に関する研究」

推薦にあたり検討の対象とされた論文（2編）

(1) Toru Soga 1997. The Camel Exchange System among the Gabra: Patterns and Consequences of Inheritance. *Ethiopia in Broader Perspective*, 2: 597- 615.

(2) 曾我亨 1998 「ラクダの信託が生む絆—北ケニア牧畜民ガブラにおけるラクダの信託制度」『アフリカ研究』52: 29-49.

候補者の研究は、互いに補完しあう二つの論文からなっている。いずれの論文も、半砂漠地帯という困難な条件のもとで実施された長期にわたる現地調査にもとづく研究の成果である。

アフリカの牧畜社会に関する従来の研究において、家畜は食糧の供給源として重要であるばかりではなく、多様な回路をとおして家畜が贈与・交換されることが、社会を組織してゆくうえで重要な機能をはたしていることが指摘されてきた。申請者が研究対象としてきたガブラという民族は、東アフリカ

の牧畜社会のなかでも、とくにきびしく乾燥した地域に分布しており、人びとの生活は、この過酷な環境に対して生理・生態学的によく適応したラクダにつよく依存することで成立している。申請者は、この人びとがおこなうラクダの贈与や交換のうち、とくに信託という特異な現象に注目して、その詳細な記載と分析をおこなっている。この研究は、従来の牧畜社会研究においては明らかにされていなかったラクダと人間のかかわりの一面を解明したのとして高く評価することができる。

第一の論文で候補者は、ラクダの所有形態と信託制度をめぐる複雑な規則群を綿密に調査・記述するとともに、ラクダのメスの子孫が次々に又貸しされることによって、所有者自身の知らない人びとの手にはラクダが広がってゆくこと、そして、ラクダが信託先で適切に管理されているかを人びとが相互に監視しあうシステムがつくり出されていることを明らかにし、そのことがクラン、あるいは民族といった集団の境界をつよく維持してゆく機能をはたしていることを指摘した。

第二の論文では、ガブラ社会では父親の家畜の大部分を長男が相続するという法的な規制のもとで、実際に人びとが何頭のラクダを所有し、信託しているのかが具体的な資料にもとづいて明らかにされている。そして、信託制度をとおしてラクダの用益権は次男以下の男性にもあたえられるのだが、所有権は長男に集中すること、そのために次男以下は社会のなかで周縁的な地位におかれるという政治的な効果が生み出されることが指摘されている。

上記の二つの論文は、いずれもラクダの信託制度に注目しながら、家族の構造と人間関係を分析し、さらにガブラ社会のコミュナルな紐帯の維持機構を、具体的な民族誌資料にもとづいて実証的に解明したものである。この成果は、東アフリカの牧畜社会の研究を発展させるうえで、多大の貢献をなすものと高く評価できる。よって審査委員会は全員一致で候補者の研究を、高島賞にふさわしい優れた研究であると判断した。